

釜石市地域生活応援システム推進事業

健康安心づくり推進調査

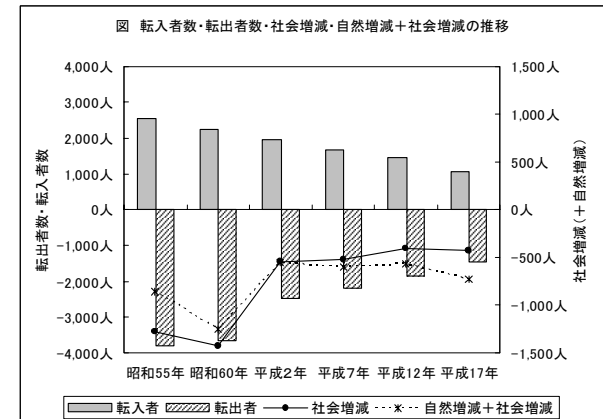
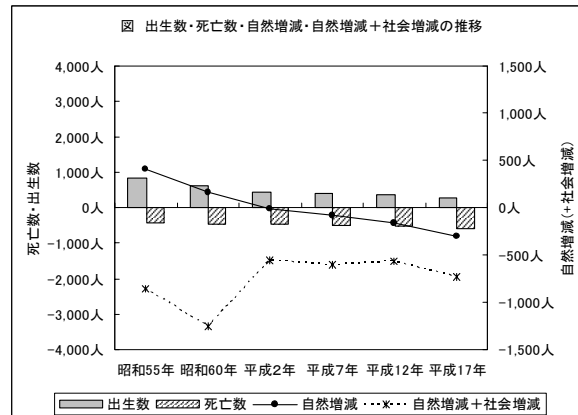
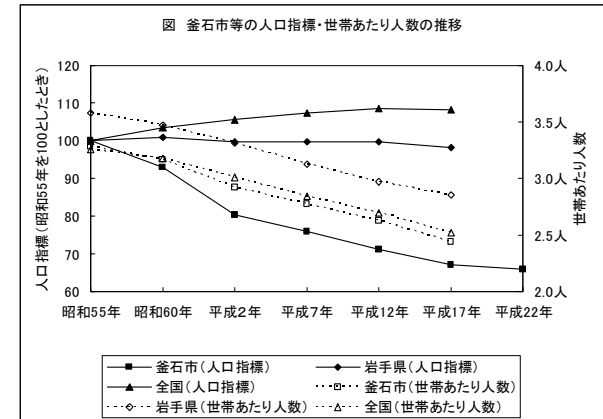
中間報告書

# I . 統計資料の分析

1. 人口(人口動態・高齢化・少子化・地区人口)
2. 産業
3. 保健・医療(保健・医療費・医療水準・入院受療動向)
4. 福祉(介護保険・障害・児童)
5. 生涯学習(講座・老人クラブ・自主活動団体)

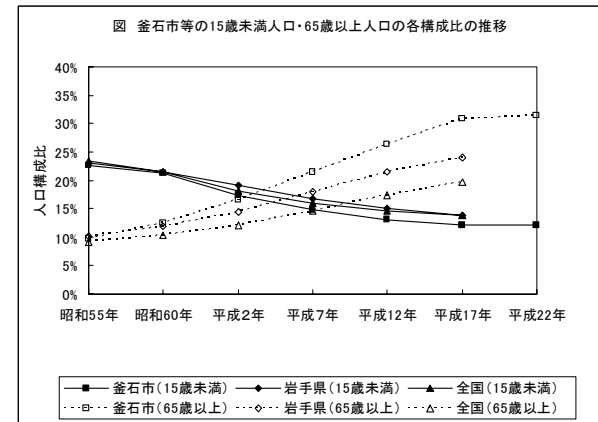
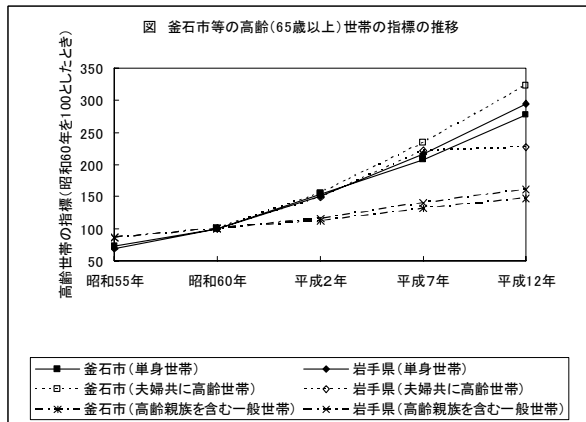
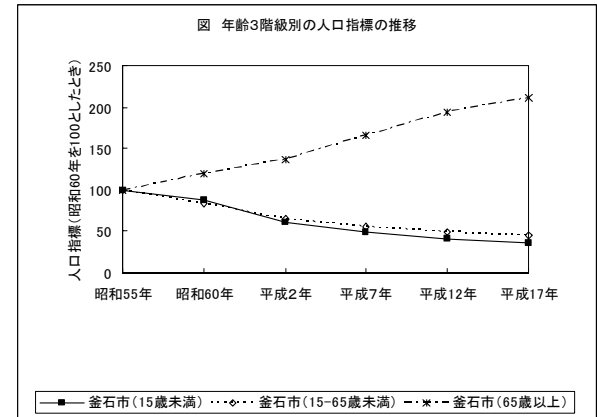
人口減少が顕著に進んでいる。  
人口流出は続いているものの、人口は定着傾向にある。

- 市の人口は昭和55年以降、一貫して減少傾向にある。
- 出生数の減少と死亡数の増加が着実に進行している。
- 転入数が減少する一方、転出数も減少傾向にあり、転出超過ではあるものの、人口の定着傾向が見られる。



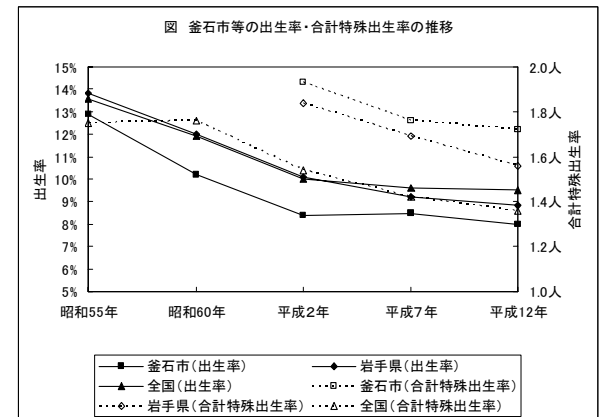
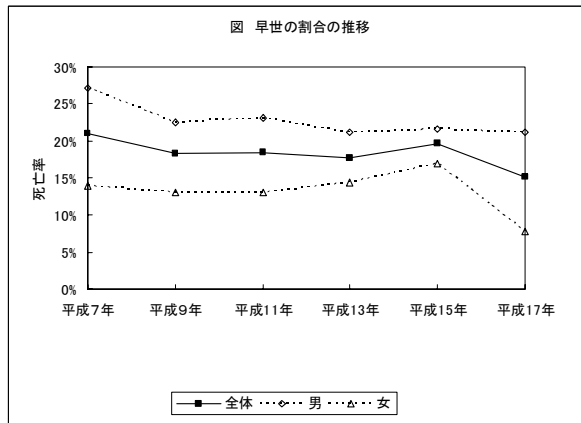
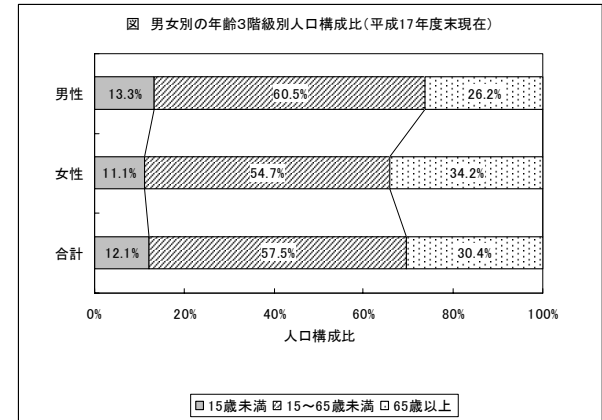
高齢化の進行が顕著に見られる。  
 高齢者の核家族世帯化も同時に進んでいる。

- 市の高齢者人口は着実に増加している。
- 高齢化率の上昇の進度は相対的に速い。
- 夫婦ともに65歳以上の夫婦世帯は増加傾向にあり、単身世帯の増加も加わり、高齢者の核家族世帯化が顕著に進んでいる。



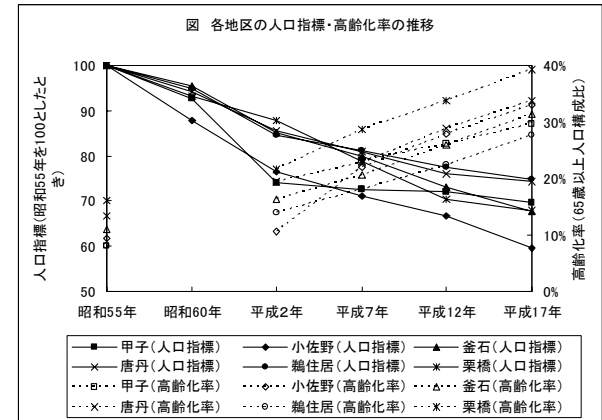
# 女性は男性に比べ長寿化が進んでいる。 女性の出生力は全国・県に比べ高い。

- 65歳以上人口の占める割合は、男性よりも女性のほうが大きい。
- 女性は男性に比べ早世の割合が低く、女性の長寿化が見られる。
- 出生率は全国・県の水準を下回っているが、合計特殊出生率は人口維持の水準(2.08)を下回りながらも全国・県の水準を上回っており、女性の出生力は相対的に高いのが特徴である。



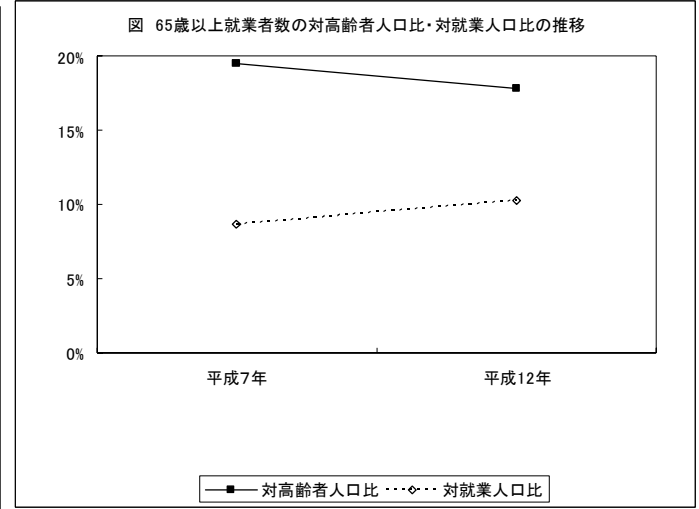
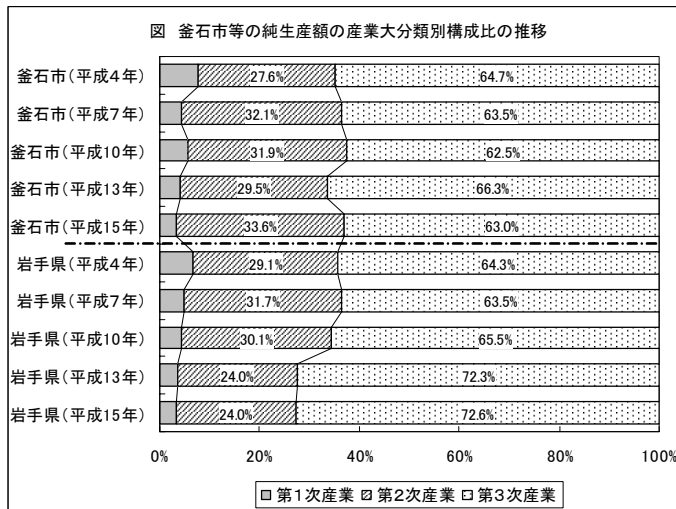
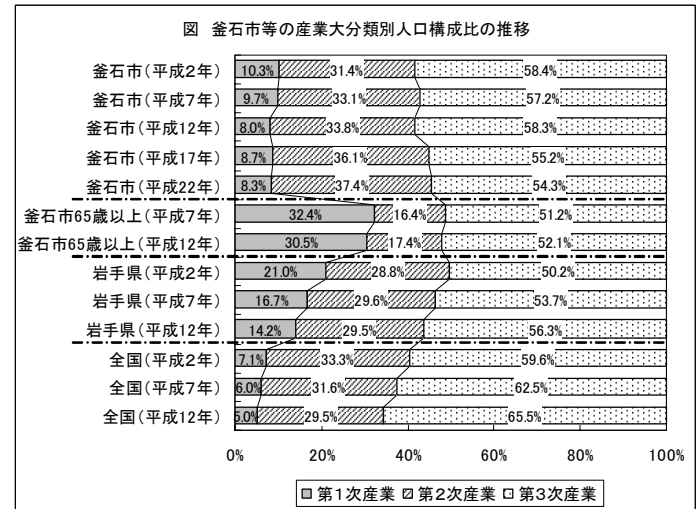
どの地区も人口減と高齢化が同時に進行している。  
人口減は小佐野地区、高齢化は栗橋地区に顕著である。

- どの地区の人口も減少傾向にあるが、小佐野地区の人口減が特に大きく、昭和55年時点の4割減である。
- どの地区の高齢化率も同じ進度で高くなっている。もっとも地区人口の少ない栗橋地区は、他地区に比べ特に高齢化率が高く、2.5人に1人が高齢者である。



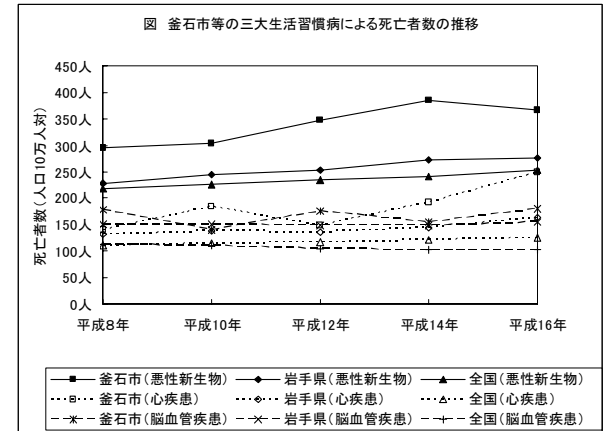
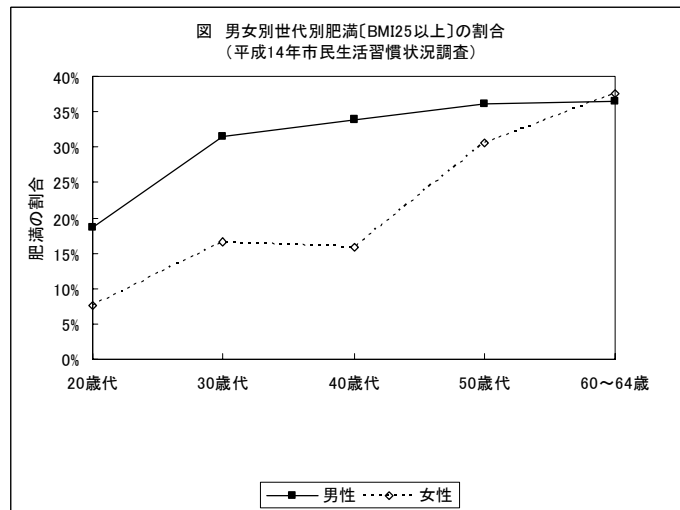
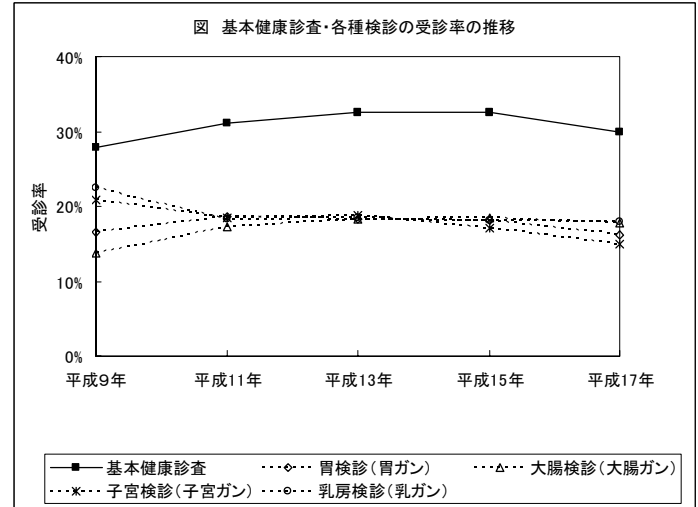
農漁業は高齢者が主力である。  
農漁業は他の産業に比べ現役年齢が長い。

- 65歳以上の就業人口は第1次産業の占める割合が第2次産業を上回っており、農漁業は高齢者が支えている。
- 65歳以上就業人口は、65歳以上人口に占める割合が減少しているものの、就業人口に占める割合は上昇している。第1次産業はホワイトカラー・ブルーカラーに比べ現役引退が遅い傾向が見られる。



男性は30歳代以降に3人に1人が肥満傾向になる。  
 ガン・心疾患・脳血管疾患の死因率は全国・県の水準より高い。

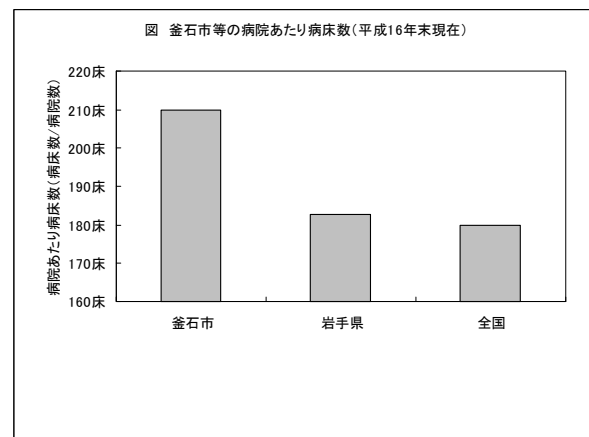
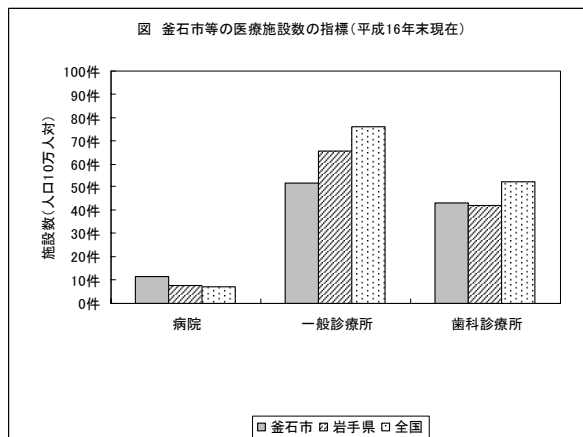
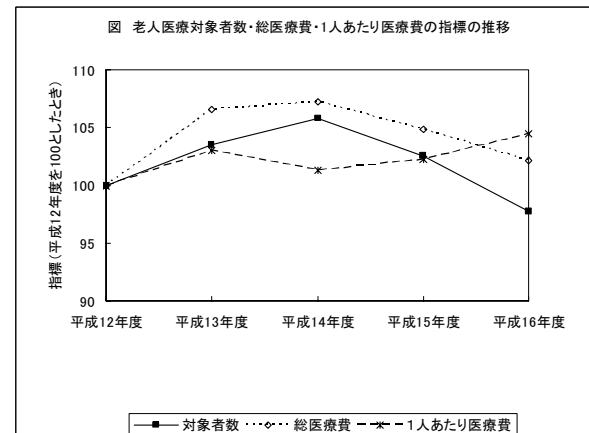
- 基本健診の受診率は30%前後で推移しているが、各種検診は20%前後で推移している。
- 男性の肥満傾向は30歳代以降に3人に1人の割合となる。女性は30歳代・40歳代にやや上昇し、50歳代以降に男性の水準にいたる。
- ガン(悪性新生物)の死亡率がたいへん高く、次いで心疾患が上昇傾向にあり、脳血管疾患が続いている。いずれも、全国・県の水準を上回っている。





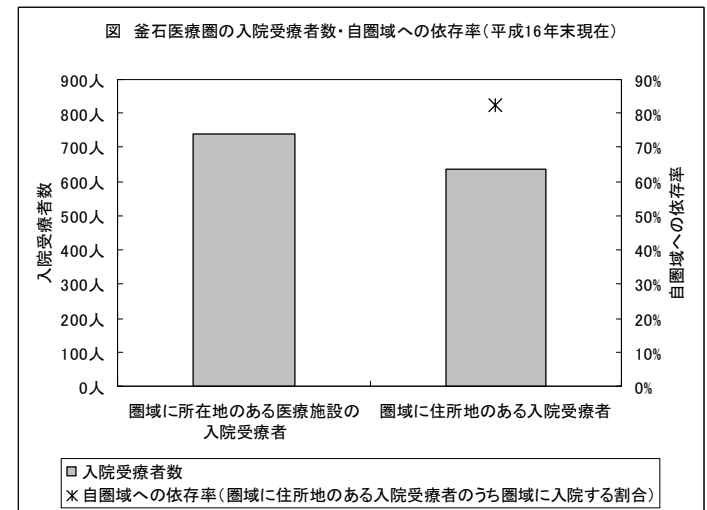
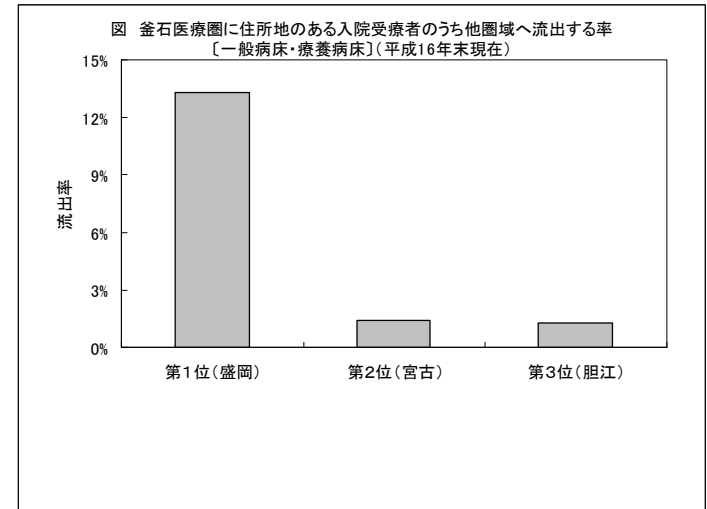
1人あたり医療費は上昇する傾向にある。  
 病院医療にやや重心の置かれた医療体制である。

- 老人医療の対象者数・総医療費は減少しているが、1人あたり医療費は上昇傾向にある。
- 病院の立地件数、病院あたり病床数は全国・県の水準を上回っている。医療水準が高いとも言えるが、一方で、病院医療が医療費水準の抑制を難しくする可能性もある。



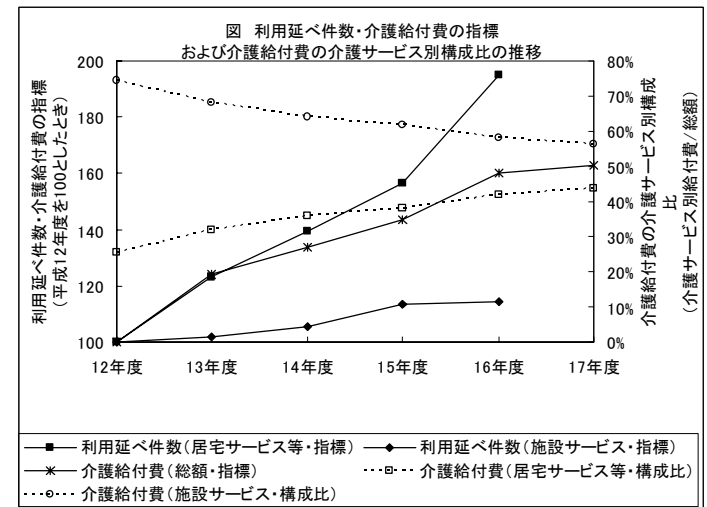
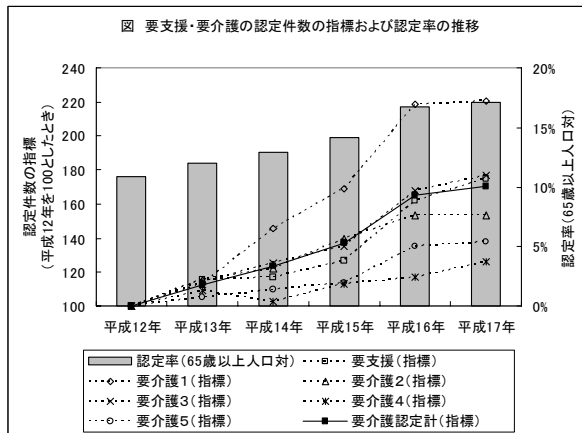
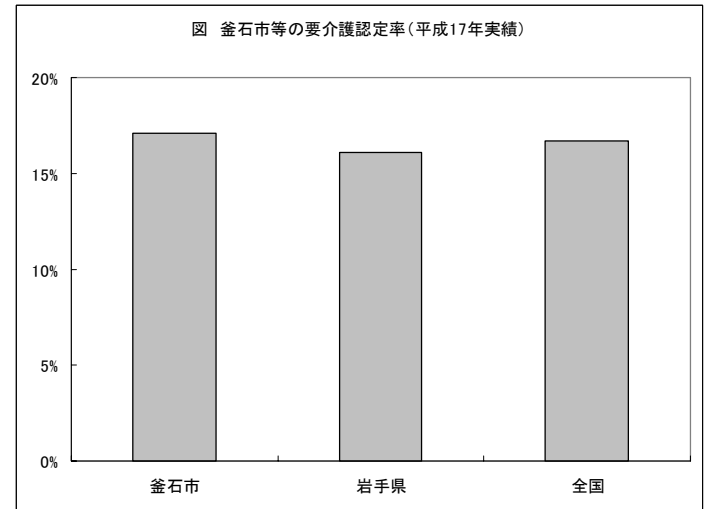
盛岡医療圏への流出率は1割強である。  
釜石医療圏への依存率は8割強である。

- 釜石医療圏に住所地のある入院患者のうち、盛岡医療圏に所在する医療施設に入院している患者(他圏域への流出率)が1割以上いる。
- 釜石医療圏に住所地のある入院患者のうち、圏域内に所在する医療施設に入院している患者(自圏域への依存率)が、8割以上いる。



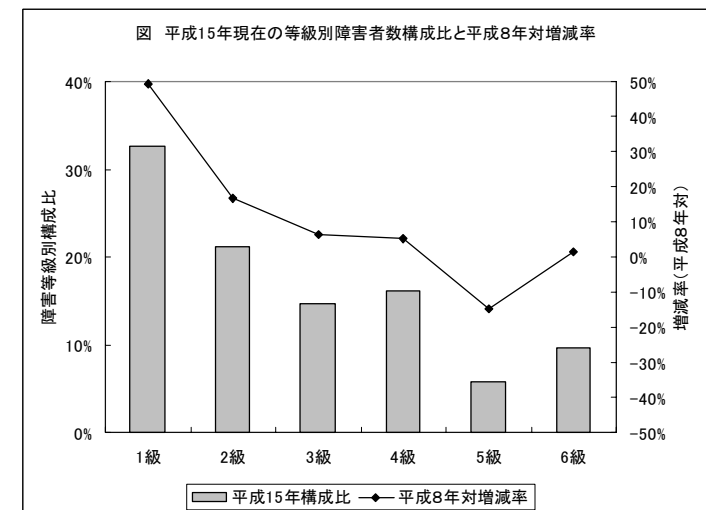
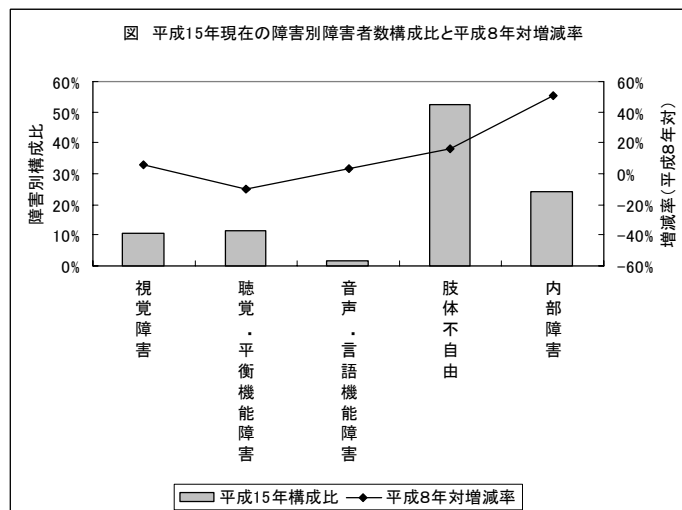
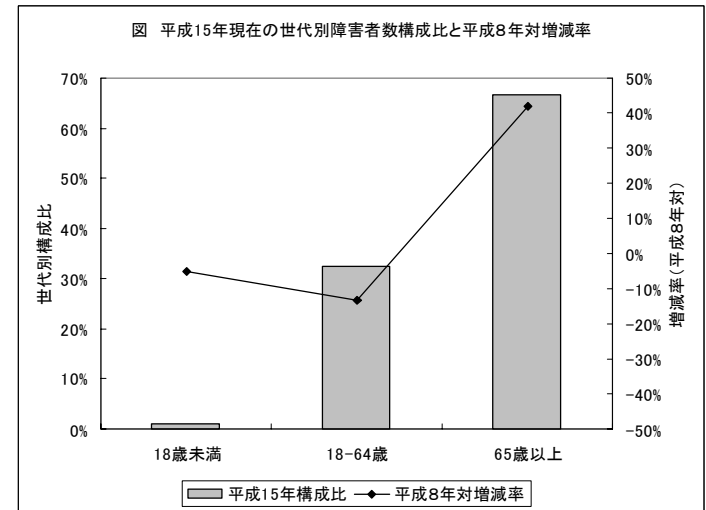
# 要支援1の認定件数が特に増えている。 介護給付費は依然、上昇傾向にある。

- 要介護認定の認定件数・認定率はともに上昇傾向にある。
- 要支援1の認定件数が特に増加している。居宅サービス等の利用件数の伸びや、軽度障害の増加と重なる傾向である。
- 介護給付費は上昇傾向にある。施設サービスの利用は抑制傾向にあるが、介護給付費に占める施設サービス費の割合はまだ高い。



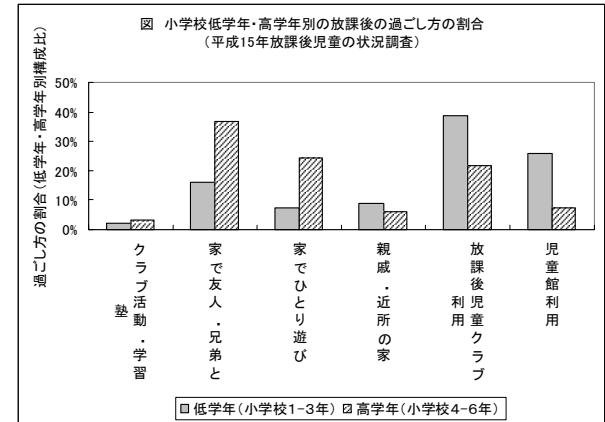
## 障害者人口の増加の背景には人口の高齢化がある。 障害種別・障害等級に人口の高齢化の影響が見られる。

- 障害者人口に占める65歳以上の割合が顕著に高く、また、65歳以上は増加傾向にある。
- 肢体不自由・内部障害の占める割合が高く、また増加しているのは、障害者人口の高齢化だけでなく高齢者人口の増加の影響と見られる。
- 軽度障害の占める割合が高く、また増加する傾向が見られるのも、高齢者人口の増加が影響していると見られる。



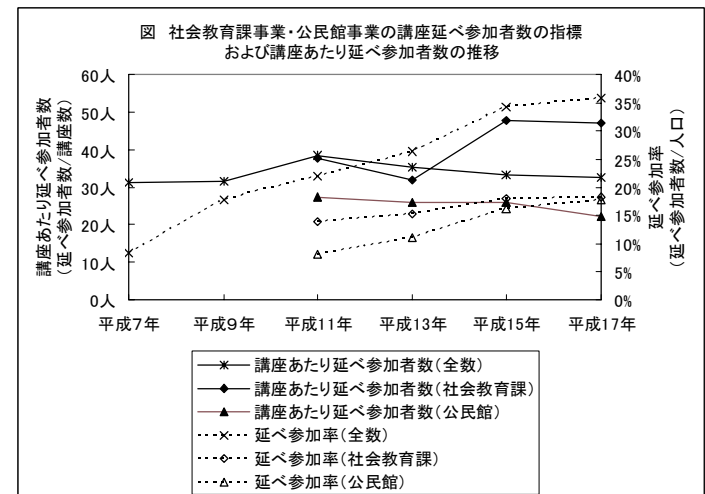
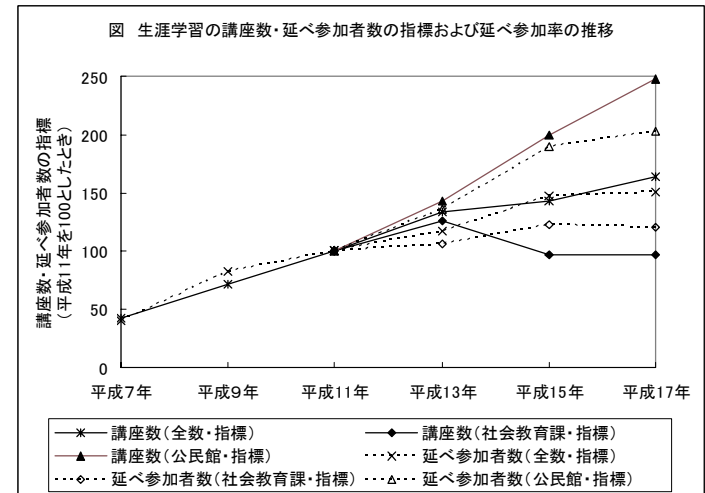
低学年は放課後、学童保育で過ごす割合が高い。  
高学年は家で過ごす割合が高く、一人遊びも多い。

- 低学年の放課後の過ごし方は、学童保育(放課後児童クラブ)、児童館などの割合が高い。
- 高学年は、家で過ごす割合が高くなる。家での過ごし方は、友人・兄弟と過ごす割合がもっとも高いものの、ひとり遊びの割合も次いで高い。



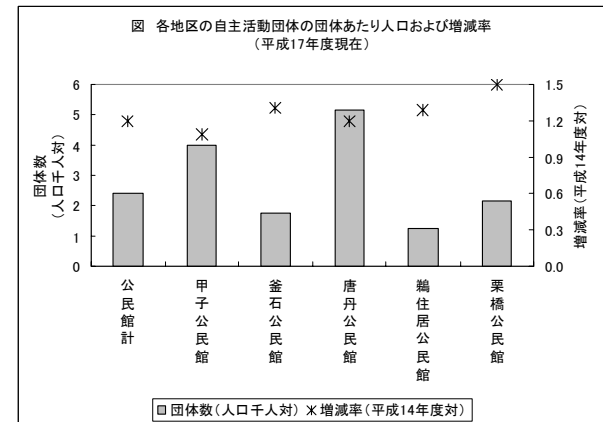
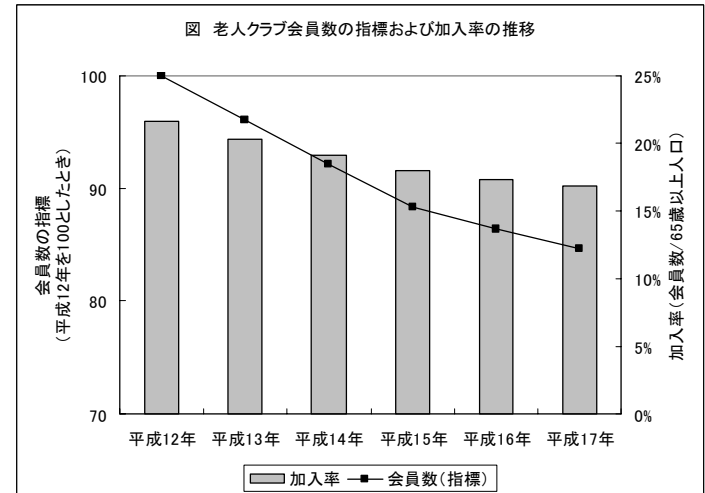
公民館講座は社会教育課講座に比べ規模が小さい。  
公民館講座は講座数の増加とともに参加率も増えている。

- 公民館主催の講座数は、伸びが大きい。一方、社会教育課主催・共催の講座数は、横ばい傾向にある。
- 講座あたりの延べ参加者数は、公民館主催講座が社会教育課主催・共催講座に比べ少なく、講座規模は相対的に小さい。また、公民館主催講座の講座あたり延べ参加者数は講座数の増を反映しやや減少傾向にある。
- 人口あたりの延べ参加率は、公民館主催講座が着実に高くなっている。ただし、講座あたり延べ参加者数はやや減少傾向にあることから、講座数の伸びほど参加率は増えていないと見られる。



## 老人クラブの規模は縮小傾向にある。 自主活動団体はどの地区もあまり増えていない。

- 老人クラブは会員数、加入率ともに減少傾向にある。
- 公民館単位の団体数(人口千人対)は、唐丹地区、甲子地区が相対的に多い。団体数の増加率はいずれの地区も1.0をやや上回る程度であり、あまり増えていない。



## Ⅱ．アンケート調査の分析

### Ⅱ-1.生活応援センター設置に係る調査

1. 調査方法・回収率・回答者の属性
2. 日々の暮らし
3. 健康
4. 地域づくり・生涯学習
5. その他



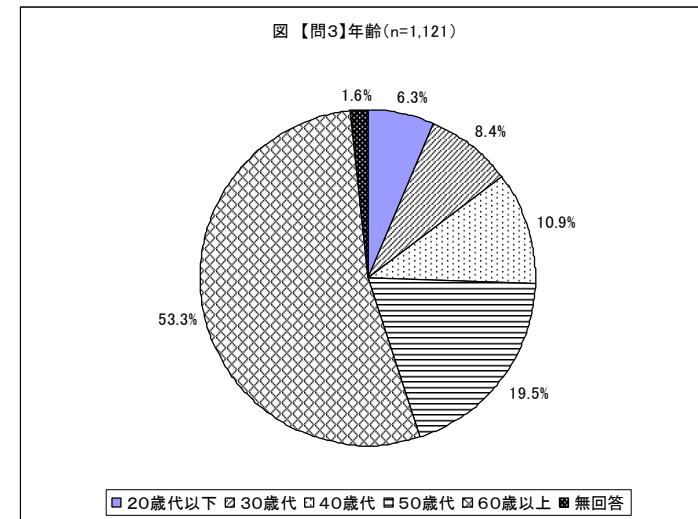
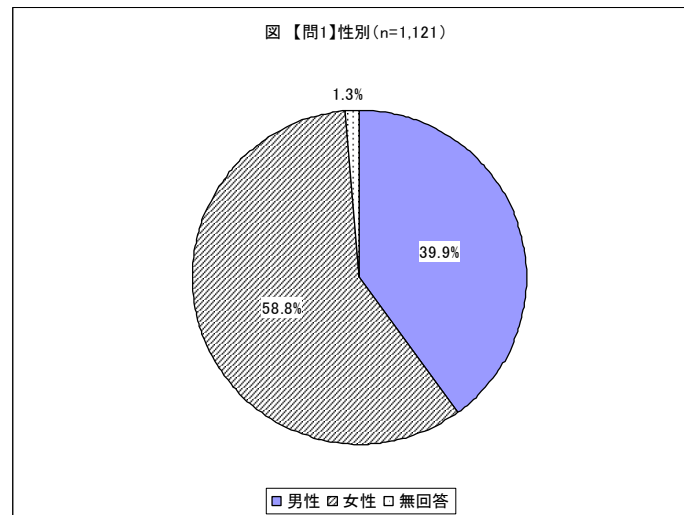
回収率は37.4%である。

男女比は4対6で、65歳以上の回答者が50%以上を占める。

- 調査は無作為抽出した19歳以上の市民3,000人を対象とし、回収率は37.4%である。
- 回答者の男女比は、おおむね4対6である。
- 60歳以上の回答者が50%以上を占めている。次いで50歳代が約20%となっており、年齢が下がると回答者の割合も低くなる傾向にある。

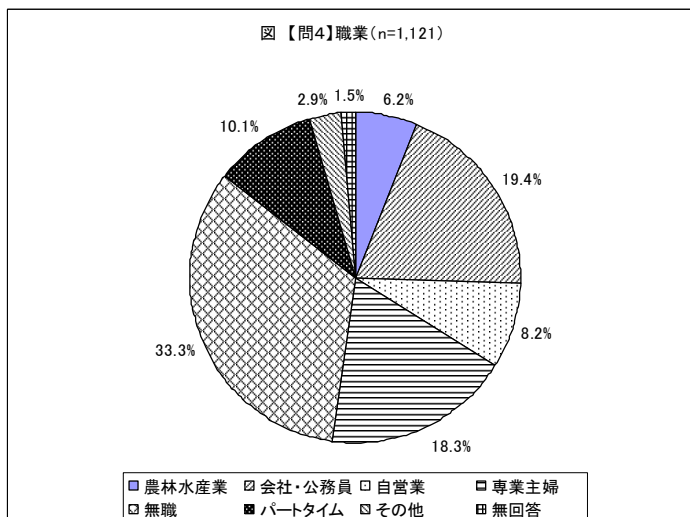
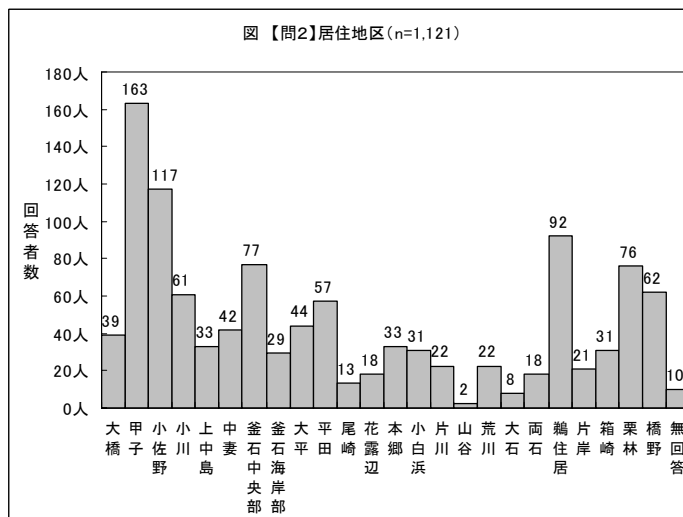
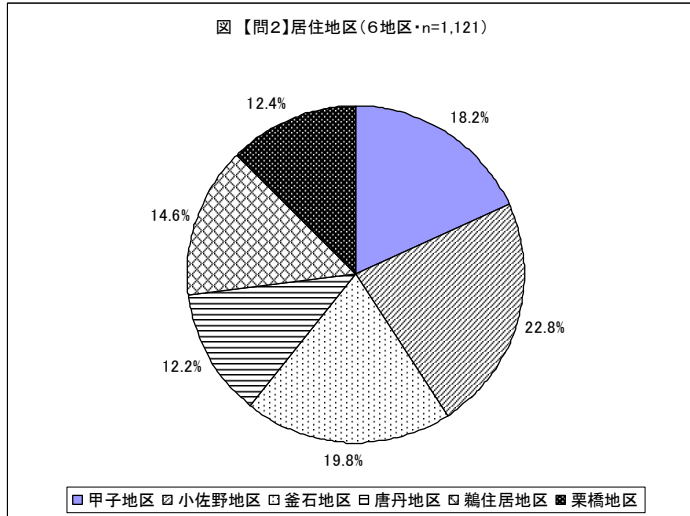
表 調査方法・回収率

項目	説明
標本	19歳以上の市民3,000人
抽出方法	住民基本台帳より無作為抽出
調査時期	平成18年7月上旬
調査方法	郵送配布・郵送回収
回収率	37.4%(回収数1,121件)



無職が3人に1人を占める。60歳以上が回答者の半数以上を占めているためと見られる。

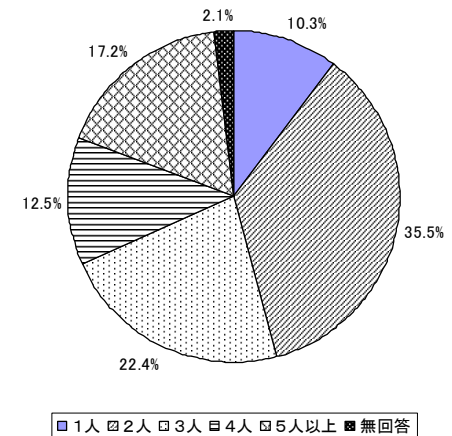
- 居住地区を6地区別に見ると、甲子・小佐野・釜石が20%前後、鵜住居が約15%、唐丹・栗林が10%前後である。
- 24地区別に見るとばらつきが大きくなり、もっとも多い甲子は163人、もっとも少ない山谷は2人である。
- 無職が回答者の33%を占める。60歳以上の回答者が50%以上を占めるためと考えられる。



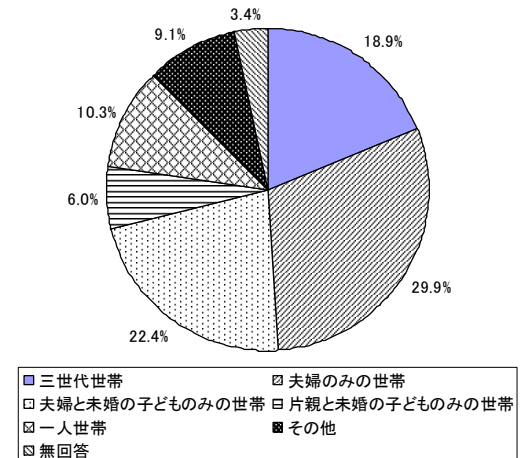
夫婦のみ世帯・二人世帯の割合が高い。  
高齢者の核家族化の進行が回答傾向に現れている。

- 家族人数は、二人世帯がもっとも多く約35%を占め、次いで三人世帯の約20%と続く。一方、5人以上の世帯も20%近くを占めている。
- 世帯構成は、夫婦のみ世帯がもっとも多く約30%を占め、続いて夫婦と未婚の子ども世帯の約20%である。一方、三世帯世帯も20%近くを占めている。
- 核家族と多世代家族の二極化傾向が見られる。
- 核家族世帯のうち、特に夫婦のみ世帯または二人世帯の回答割合が高いのは、60歳以上の回答者の家族状況を反映しているためと見られる。

図【問5】家族人数(n=1,121)



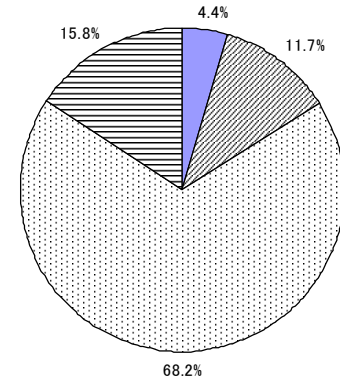
図【問6】世帯構成(n=1,121)



10年以上の居住者が70%以上を占めている。

- 居住期間10年以上の回答者が70%近くを占める。
- 居住期間10年未満の回答者が少ないのは、若年世代・中年世代の回答者数が少ないためと見られる。

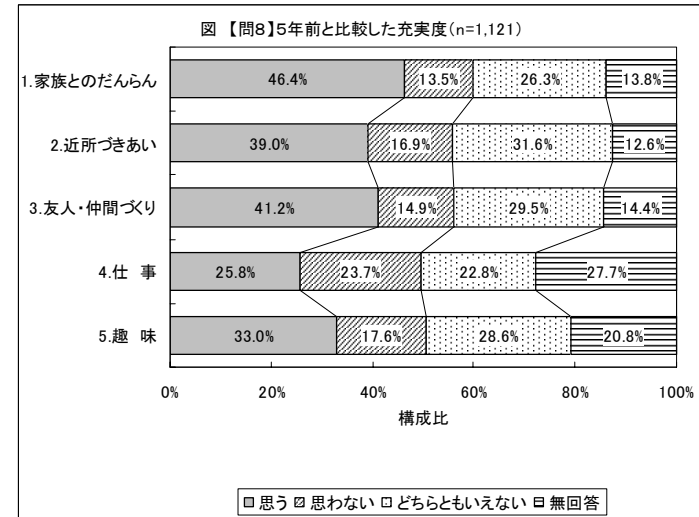
図 【問7】現在地での居住期間(n=1,121)



■ 3年未満 □ 3年以上10年未満 ▨ 10年以上 ◻ 無回答

## 5年前に比べ、家族とのだんらんなど対人関係が充実する傾向にある。

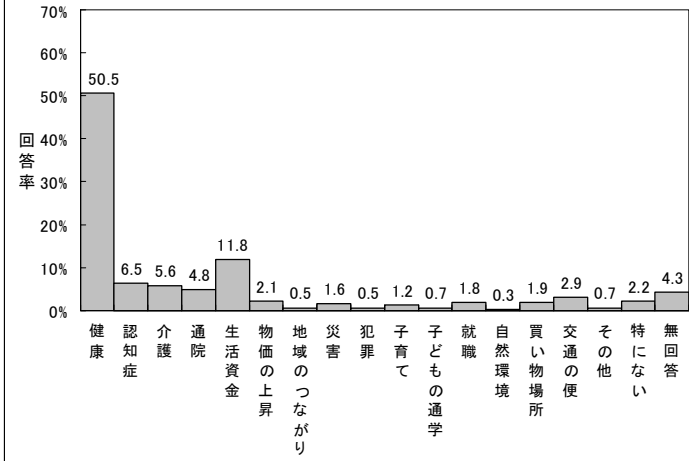
- 45%以上の回答者が、5年前と比較して家族とのだんらんに充実を感じている。また、近所づきあい、友人・仲間づくりも40%前後となっている。一方、仕事と趣味はやや低く、それぞれ約25%、約30%である。
- 家族関係・近隣関係・社会関係など、対人関係が5年前に比べ充実した回答者の割合が高い。



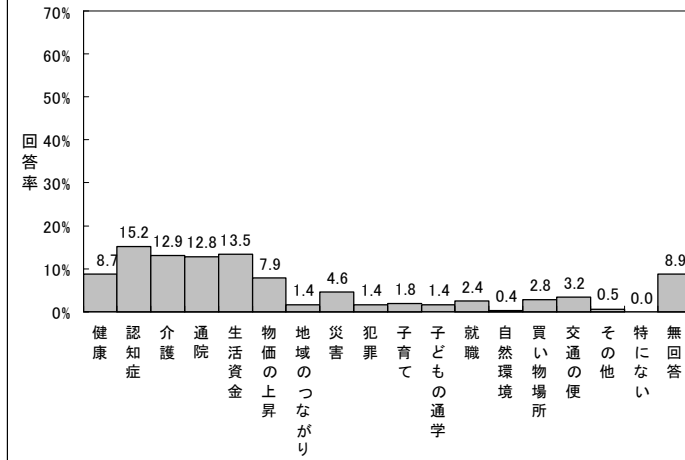
約50%の回答者が1番目に健康を挙げている。  
60歳以上の回答者の不安傾向が強く現れている。

- 1番目に、約50%の回答者が健康を挙げている。
- 2番目には、認知症、介護、通院、生活資金がいずれも15%近くを占めている。
- 3番目には、介護、生活資金、生活の便がいずれも10%を越えている。
- 健康への不安が顕著に高いのは、60歳以上の回答者が半数以上を占めるためと見られる。

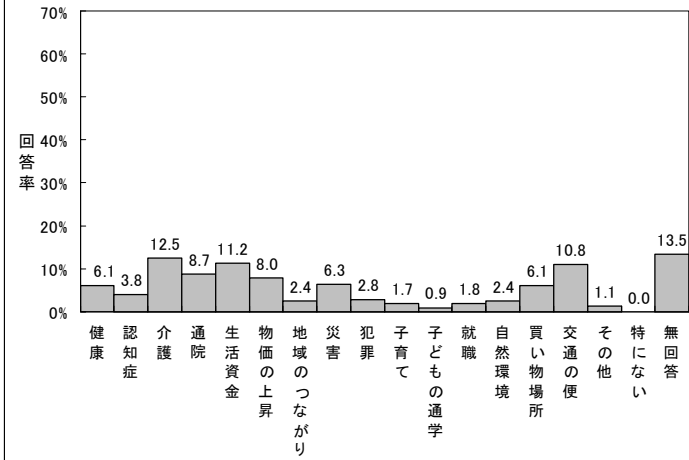
図【問9】将来の暮らしの不安・不便(1番目・n=1,121)



図【問9】将来の暮らしの不安・不便(2番目・n=1,121)



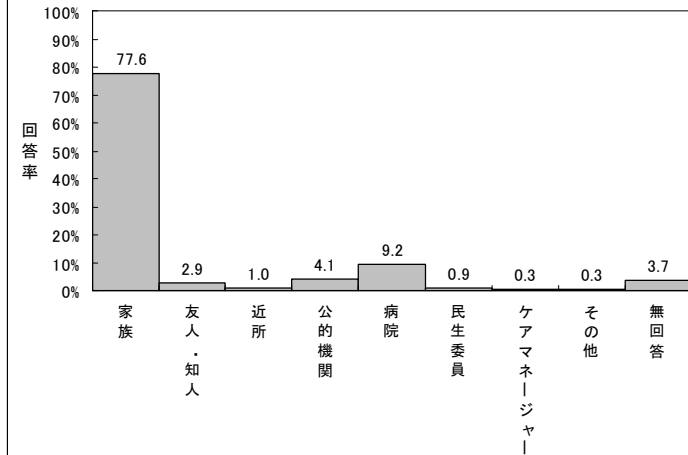
図【問9】将来の暮らしの不安・不便(3番目・n=1,121)



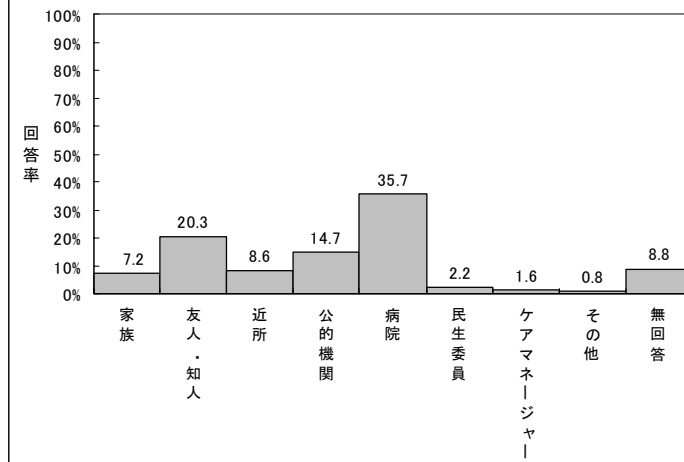
80%近くの回答者が1番目に頼るのは家族である。  
家族に次いで病院に頼る傾向が見られる。

- 1番目に、80%近くの回答者が家族に頼ると回答している。
- 2番目には、約35%が病院、約20%が友人・知人を挙げている。
- 3番目には、25%前後が病院、公的機関を挙げている。
- まず家族を頼り、必要に応じて病院を頼る傾向が見られる。

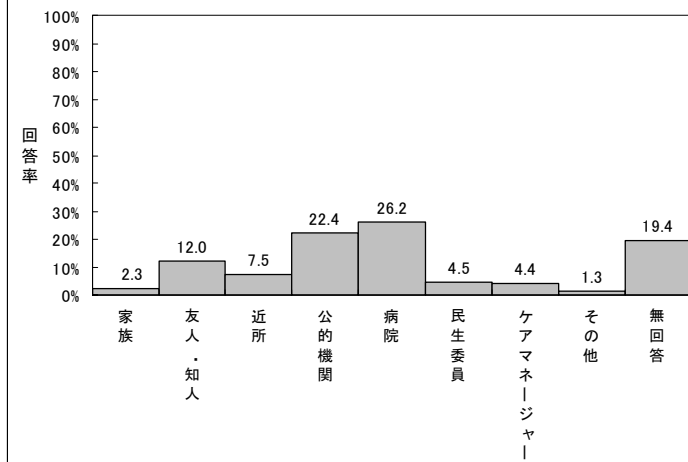
図【問10】健康・生活の不安時に頼る人・機関(1番目・n=1,121)



図【問10】健康・生活の不安時に頼る人・機関(2番目・n=1,121)



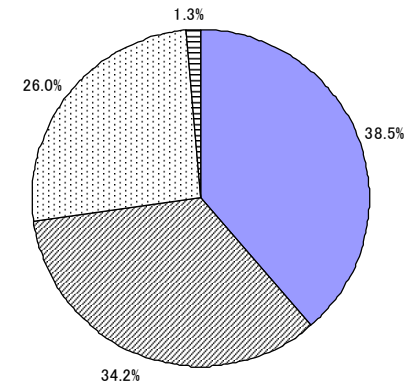
図【問10】健康・生活の不安時に頼る人・機関(3番目・n=1,121)



健康と思う回答者と、思わない回答者の割合は拮抗している。  
60歳以上の回答者は、体調が悪いと感じる傾向にある。

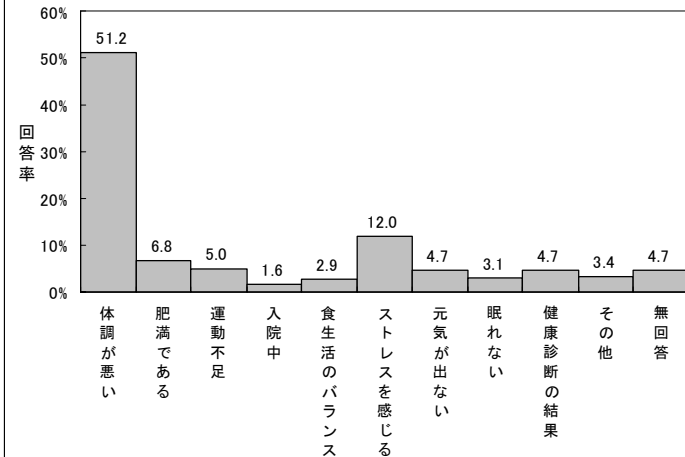
- 健康であると思う回答者と、思わない回答者はともに35%前後で、ほぼ拮抗している。
- 健康と思わない回答者の50%以上は、体調が悪いと回答している。
- 健康と思わない回答者の10%以上が、ストレスを挙げている。
- 体調が悪いと回答する割合が顕著に高いのは、60歳以上の回答者が50%以上を占めているためと見られる。

図【問11】主観的健康観(n=1,121)



■ 健康であると思う □ 健康であるとは思わない □ どちらともいえない □ 無回答

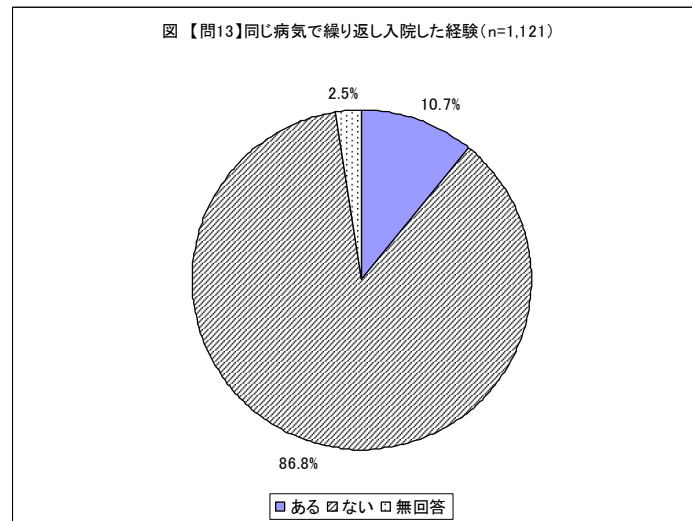
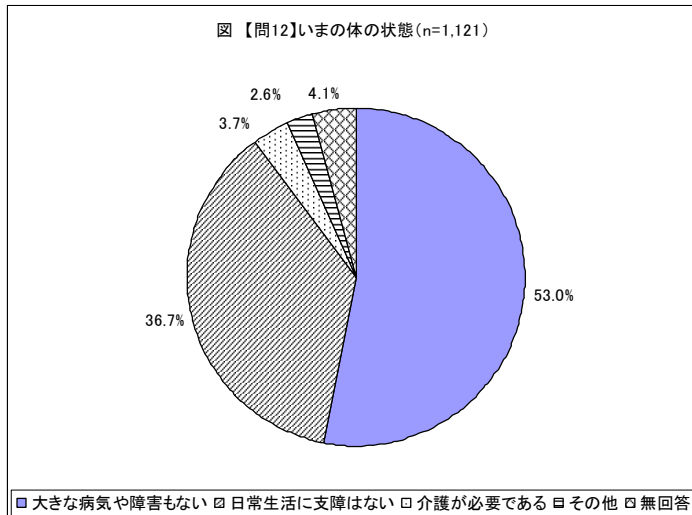
図【問11-1】健康と思わない理由(n=383)





90%近くが自立して生活している。  
繰り返し入院した経験のある回答者は約10%である。

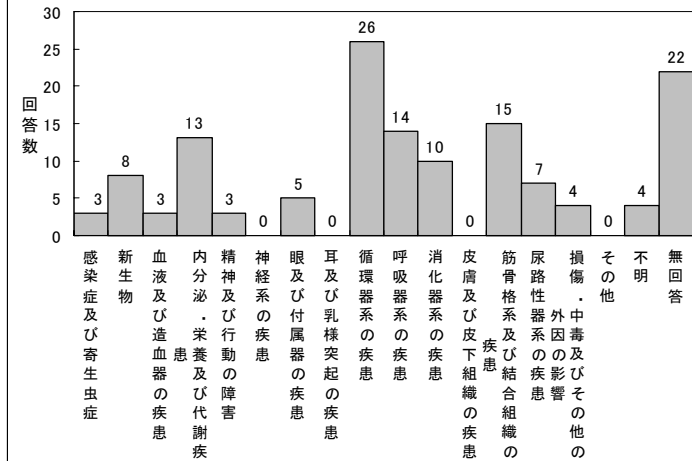
- 50%以上の回答者が大きな病気や障害もなく、次いで、35%以上の回答者は日常生活に支障がない。回答者の90%近くが自立して生活している。
- 同じ病気で繰り返し入院した経験のある回答者は、約10%である。
- 10人に1人が入退院を繰り返しているのは、60歳以上の回答者が50%以上を占めていることの影響と見られる。



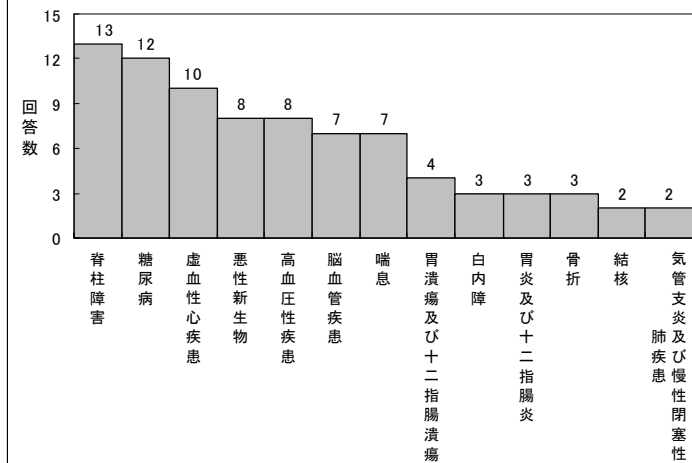
高齢者特有の疾患や生活習慣病が多く挙げられている。  
若年世代から1次予防へ取り組むことが必要である。

- 入院を繰り返した病気を疾病大分類別に見ると、循環器系の疾患が顕著に高い。
- 同様に、病名を下位分類別に見ると、高齢者に多い脊柱障害(腰痛等)、代表的な生活習慣病である糖尿病・高血圧性疾患、三大死因である虚血性心疾患(心臓病)・悪性新生物(ガン)、脳血管性疾患(脳卒中・脳梗塞)が上位に並んでいる。
- 若年世代から生活習慣病に対する1次予防に取り組む必要性が高いと考えられる。

図【問13-1】入院時の病名(疾病大分類別・n=120)



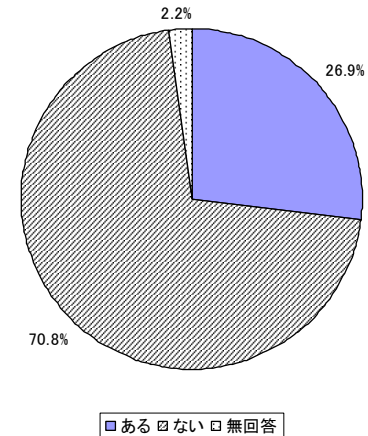
図【問13-2】入院時の病名(下位分類別に見た2件以上の疾病)



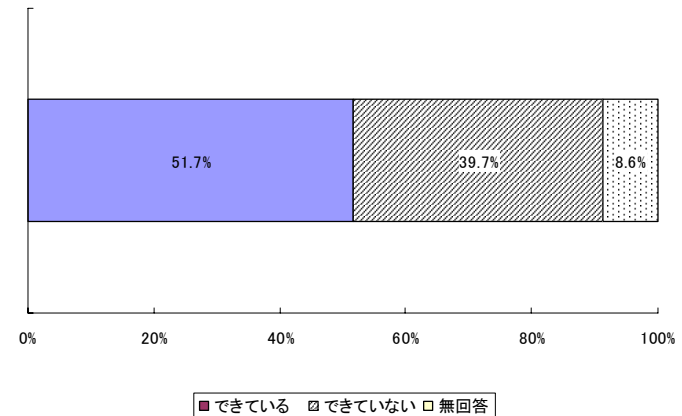
40%近くが指導にもとづいた食生活・運動を実践していない。  
1次予防・2次予防の体制づくりが課題である。

- 25%を越える回答者は、病院から食生活・運動について指導された経験がある。
- 指導経験のある回答者の40%近くは、指導された食生活・運動を実践できていない。
- 生活習慣病の1次予防・2次予防の観点からは、食生活・運動による生活習慣の改善を確実に実践してもらうための体制づくりが必要と考えられる。

図【問14】食生活・運動を病院から指導された経験(n=1,121)

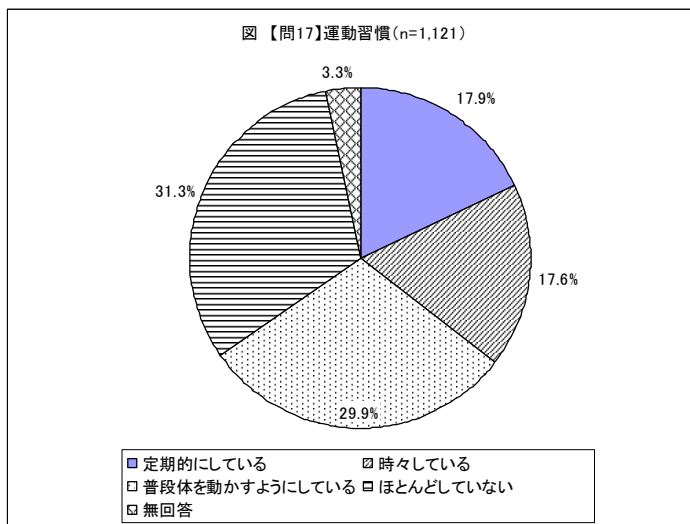
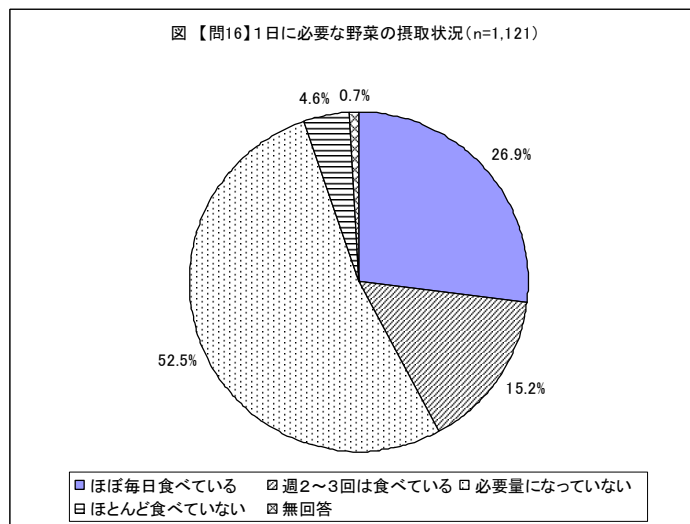
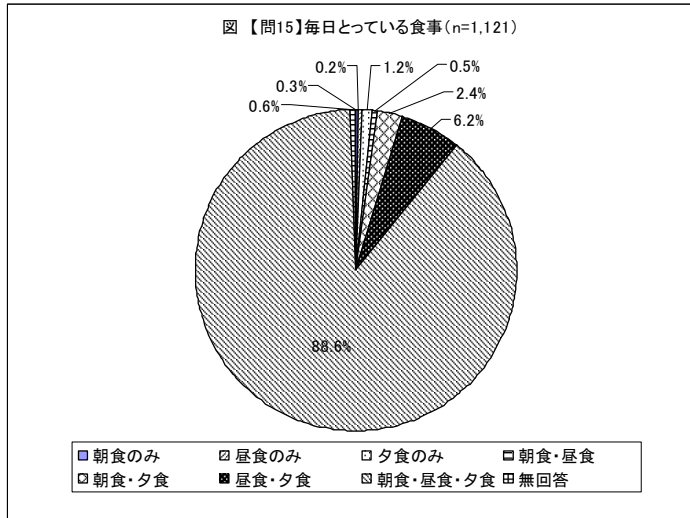


図【問14-2】指導の実行(n=302)



50%以上が野菜の摂取量が不足していると回答している。  
適切な生活習慣を身につけるための環境づくりが必要である。

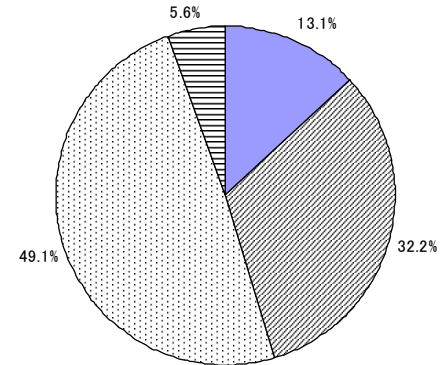
- 90%近くの回答者が朝食・昼食・夕食を食べている。
- 50%以上の回答者は野菜の摂取量が必要量になっていない。
- 30%以上の回答者はほとんど運動していない。
- 若年世代から食生活・運動等の習慣を正しく身につけるための環境づくりが必要である。



50%近くが歯の定期検診を受診していないと回答している。  
健康な歯は高齢期の心身の健康の維持からも重要である。

- 50%近くの回答者が歯の定期検診を年に1回、受診していない。
- 介護予防事業の6つの柱の一つに口腔ケアが入るなど、丈夫で健康な歯は高齢期の心身の健康の維持に必要不可欠である。若年世代から、歯の定期検診を受診する環境づくりが重要である。

図【問18】歯の定期検診受診状況(n=1,121)

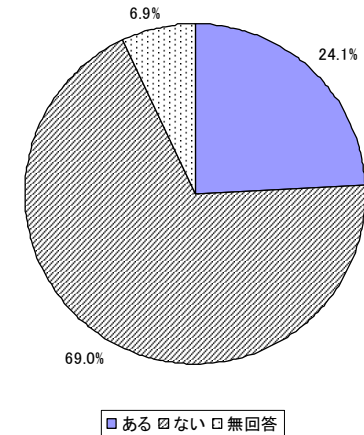


■定期的に受けている ■過去に受けたことがある □受けたことがない □無回答

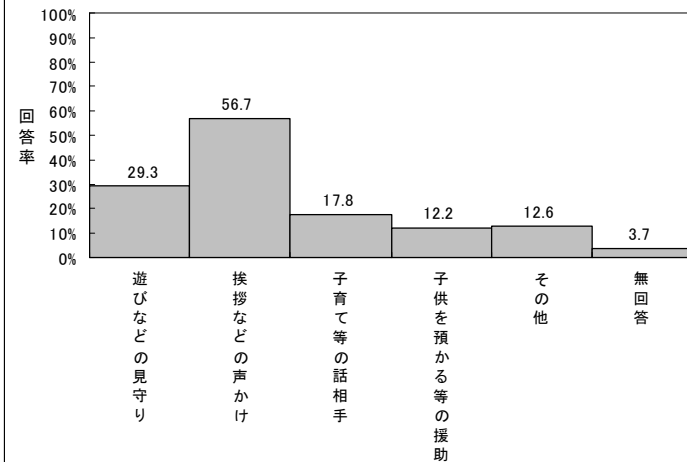
約70%の回答者は地域の子育て家庭と触れ合う機会がない。  
高齡化・少子化・都市化による多世代交流の減少が見られる。

- 約70%の回答者は、地域で子育てをしている乳幼児の家庭と触れ合う機会がない。
- 乳幼児の家庭と触れ合う機会がある回答者の50%以上が、触れ合う機会の内容として挨拶などの声かけを挙げている。次いで、遊びなどの見守りが約30%、子育て等の話し相手が20%弱となっている。
- 回答者の50%以上が60歳以上の高齡者であることをふまえると、地域社会の高齡化・少子化・都市化の同時進行の影響で、高齡世代と子育て世代の交流が減少し、高齡者が乳幼児の家庭と触れ合う機会が少なくなりつつあること、また、触れ合う内容も支え合い等の深い関係がなくなりつつあると考えられる。

図【問19】地域のほかの乳幼児の家庭に触れ合う機会(n=1,121)



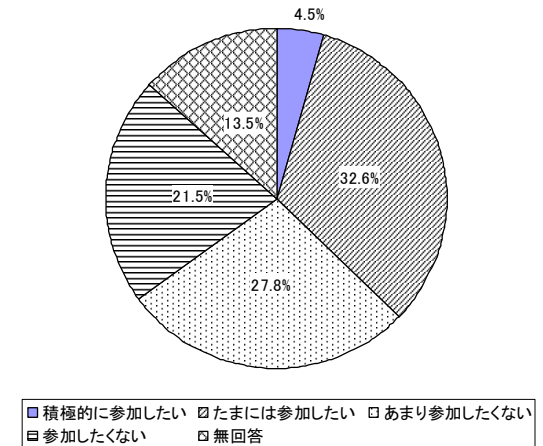
図【問19-1】触れ合う機会の内容(複数回答・n=270)



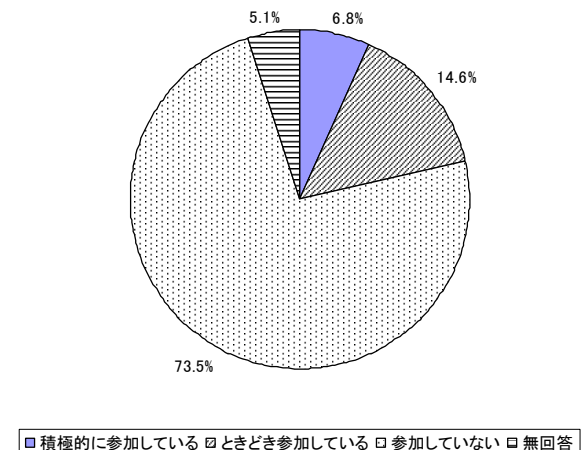
子育て等のボランティア活動の参加には消極的である。  
60歳以上の回答者は子育てへの参加に消極的と見られる。

- 地域に子育てボランティアグループがあった場合、30%以上の回答者がたまには参加したいと回答している。一方で、30%近くの回答者があまり参加したくない、約20%の回答者が参加したくないと回答しており、50%近くの回答者は参加に消極的である。
- ボランティア活動の状況については、15%近くの回答者がときどき参加している。一方で、70%以上が参加していない。
- 高齢世代は他の世代に比べボランティア活動に参加する傾向にあるが、子育てボランティアは敬遠する傾向があると考えられる。

図【問20】地域に子育てボランティアグループがあった場合の参加意向  
(n=1,121)



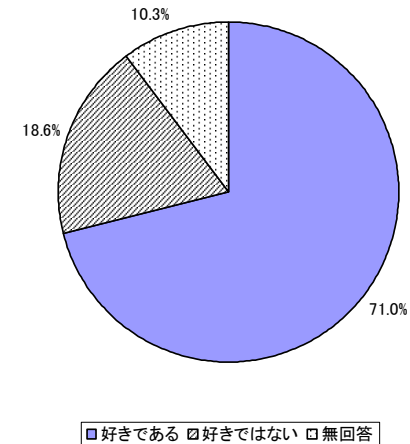
図【問22】ボランティア活動の参加状況(n=1,121)



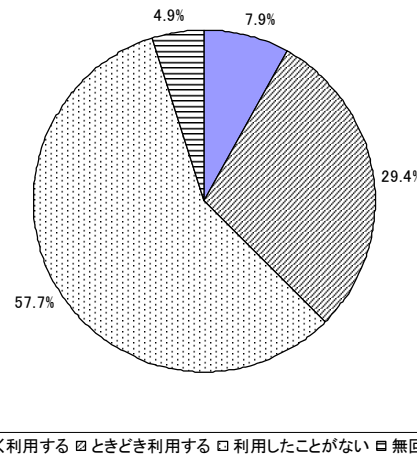
70%以上の回答者はいま住んでいる地区が好きである。  
70%近くの回答者は公民館を利用したことがない。

- 70%以上の回答者はいま住んでいる地区が好きである。
- 30%近くの回答者が公民館をときどき利用するが、一方で70%近くの回答者が公民館を利用したことがない。
- 公民館を利用したことがない回答者の30%前後は時間的余裕がない、必要性を感じないと回答し、15%強は興味・関心がないと回答している。

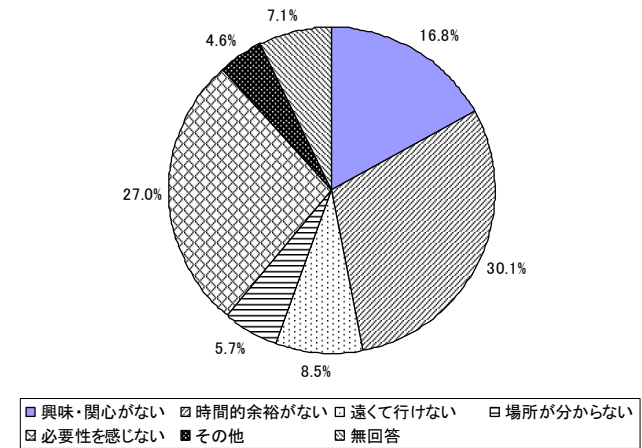
図【問21】いま住んでいる地区の好嫌(n=1,121)



図【問23】公民館の利用状況(n=1,121)



図【問23-1】公民館を利用していない理由(n=647)

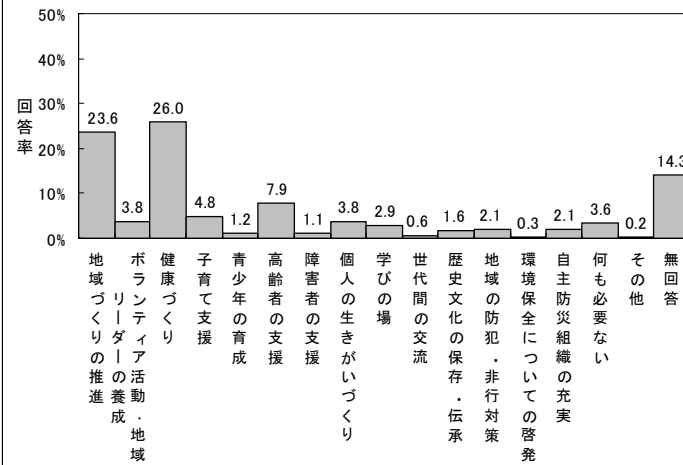




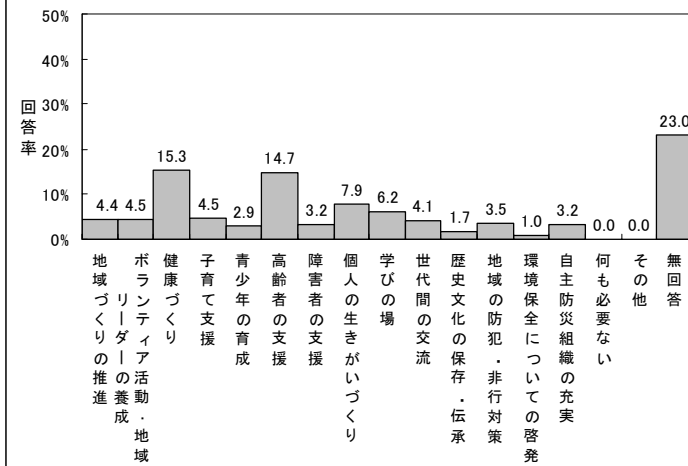
公民館に対しては地域づくり、健康づくり等の要望が大きい。  
若年世代が少ないため子育て等の割合は低いと見られる。

- 1番目は、地域づくりの推進、健康づくりが並び、それぞれ25%前後を占めている。
- 2番目は、健康づくり、高齢者の支援が並び、それぞれ15%前後を占めている。
- 3番目は、高齢者の支援が10%を占め他よりやや高いが、回答は分散傾向にある。
- 若年世代の回答者数が少ないため、子育て等の回答割合は低くなっていると見られる。

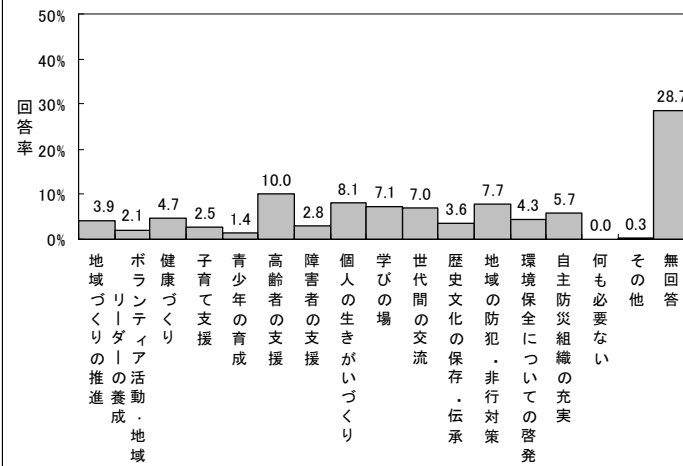
図【問24】今後、公民館活動で充実させたい取り組み(1番目・n=1,121)



図【問24】今後、公民館活動で充実させたい取り組み(2番目・n=1,121)



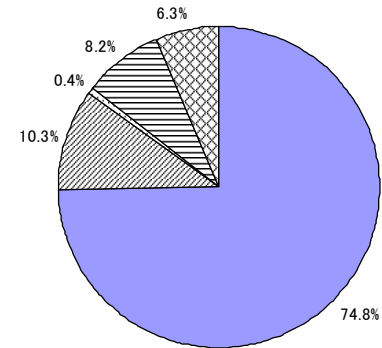
図【問24】今後、公民館活動で充実させたい取り組み(3番目・n=1,121)



70%以上が生涯学習は大切であると回答している。  
 学びの行動回数は多くなく、動機づけが課題である。

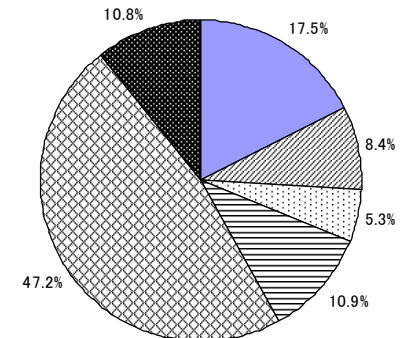
- 70%以上の回答者が、生涯学習は大切であるという考えである。
- 1年間に学びをした回数については、50%近くの回答者が特に行っておらず、また、20%近くが2回～5回程度行っている。
- 生涯学習の重要性は認識するものの、実践にはいたっていない現状が見られる。生涯学習を動機づける方策が求められている。

図【問5】生涯学習に対する考え(n=1,121)



■ 大切だと思う □ どちらともいえない □ 大切ではない □ わからない □ 無回答

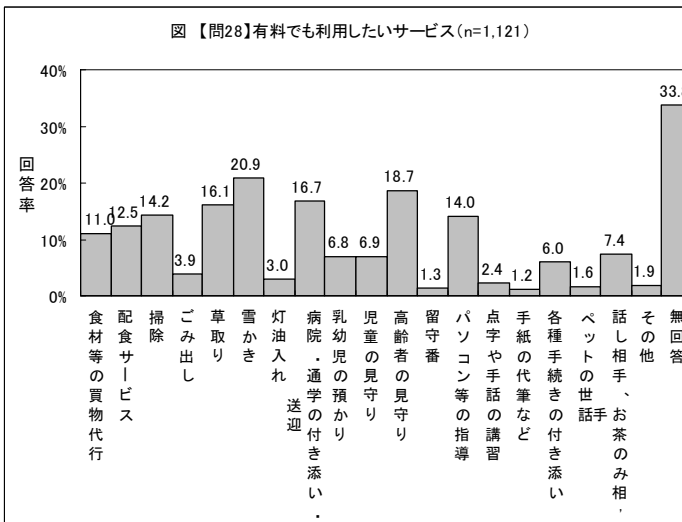
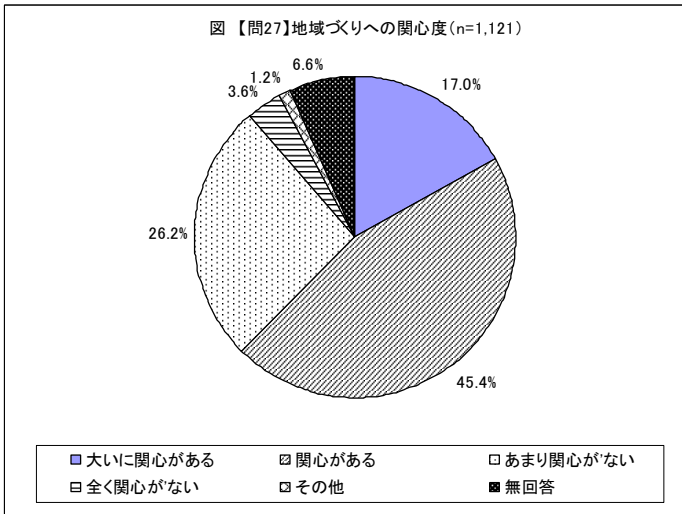
図【問26】この1年間に学びをした回数(n=1,121)



■ 2回～5回程度 □ 6回～8回程度 □ 9回～15回程度  
 □ 16回以上 □ 特に行わなかった □ 無回答

60%以上が多少とも地域づくりに関心を持っている。  
雪かき・高齢者の見守り等のサービスは有料でも需要がある。

- 15%以上の回答者が地域づくりに大いに関心があり、約45%の回答者も関心がある。あわせて60%以上の回答者が、多少とも地域づくりに関心を持っている。
- 有料でも利用したいサービスは回答が分散する傾向にあるが、雪かき(約20%)、高齢者の見守り(20%弱)、病院・通学の付き添い・送迎および草取り(16%前後)などの回答割合は相対的に高い。
- 若年世代の回答者数が少ないため、乳幼児の預かりや児童の見守りの回答割合は低くなっていると見られる。



## Ⅱ．アンケート調査の分析

### Ⅱ-2.子育てに関する調査

1. 調査方法・回収率・回答者の属性
2. 子どもの年齢・人数
3. 子どもの成長状況
4. 子育てに対する自信
5. 相談相手・機関
6. 子育て中の気持ち
7. 子育てのしやすさ
8. 子育てへの応援

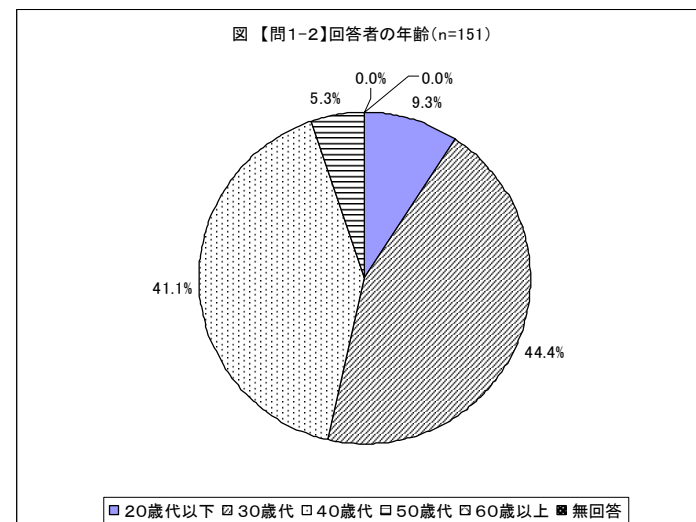
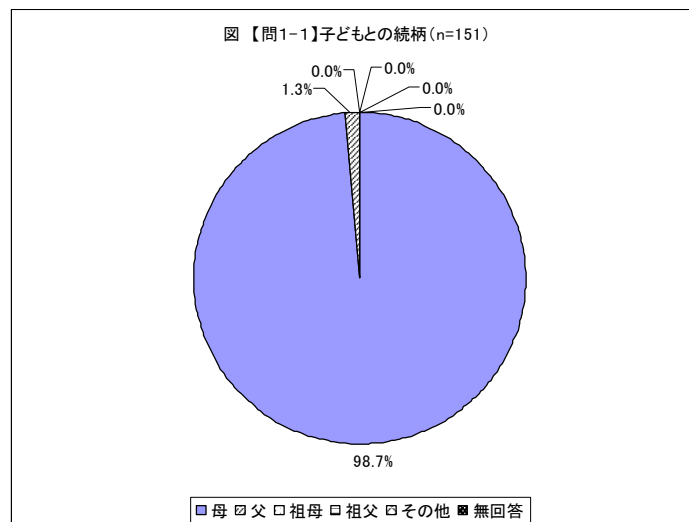
回収率は37.8%である。

ほぼ全数が母親で、30歳代・40歳代で約85%を占める。

- 調査は無作為抽出した19歳以上の市民400人を対象とし、回収率は37.8%である。
- 回答者の子どもとの続柄は、父2人を除くとすべてが母である。
- 回答者の年齢は、30歳代がおおむね45%、40歳代がおおむね40%であり、30歳代・40歳代で約85%を占める。

表 調査方法・回収率

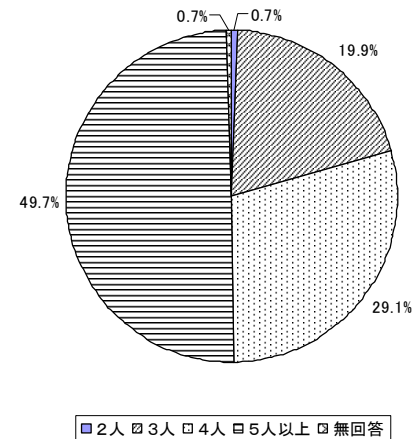
項目	説明
標本	18歳以下の子どもがいる400世帯
抽出方法	住民基本台帳より無作為抽出
調査時期	平成18年7月上旬
調査方法	郵送配布・郵送回収
回収率	37.8%(回収数151件)



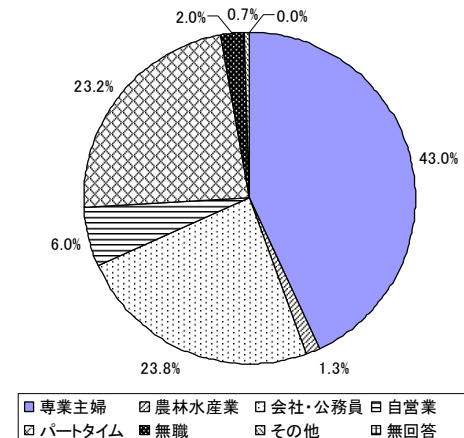
5人以上の家族が半数を占めている。  
専業主婦など母親に特徴的な職業が高い割合を占めている。

- 5人以上の家族がもっとも多く約50%を占めている。続いて、4人家族が約30%、3人家族が約20%である。
- 世帯人数の多いのが特徴である。
- 回答者の職業は、専業主婦がもっとも多く45%近くを占め、続いて会社・公務員とパートタイムがそれぞれ20%強を占める。
- 専業主婦とパートタイムで65%以上を占め、母親によく見られる職業が高い割合を占めている。

図【問1-3】家族人数(n=151)



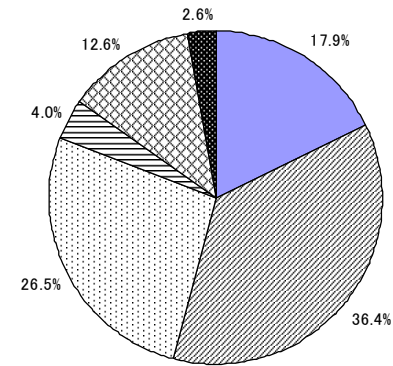
図【問1-4】職業(n=151)



回答者の居住地区は小佐野、釜石、甲子が多い。  
建物形態は戸建が60%以上を占め、残りは共同住宅である。

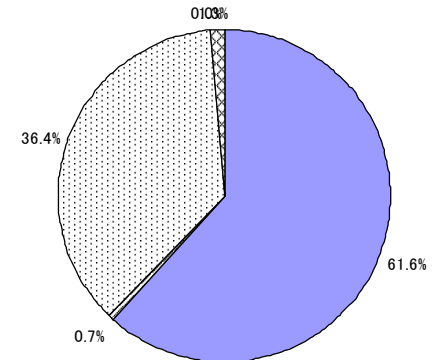
- 回答者の居住地区は、小佐野がもっとも多く35%以上を占めている。次いで、釜石が25%強、甲子が20%弱を占め、3地区で約80%となる。
- 住居の建物形態は、一戸建が60%以上を占めている。次いで共同住宅が35%以上を占め、回答者の住宅はほぼ一戸建か共同住宅のどちらかである。

図【問1-5】居住地区(n=151)



■ 甲子地区 □ 小佐野地区 □ 釜石地区 □ 唐丹地区 □ 鶯住居地区 ■ 栗橋地区

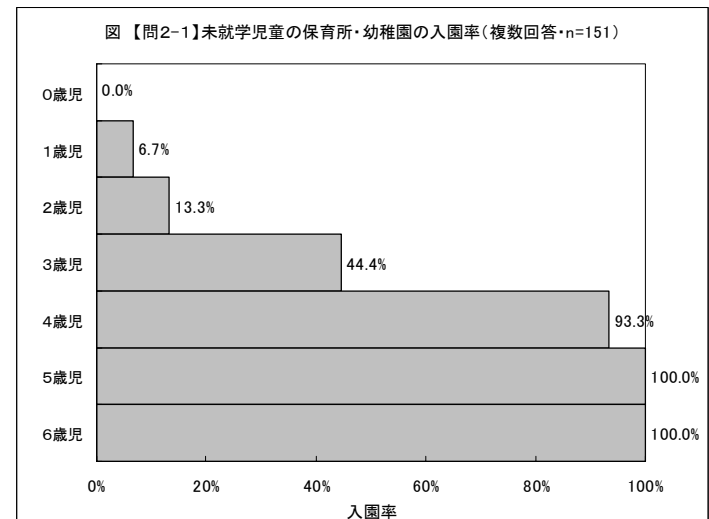
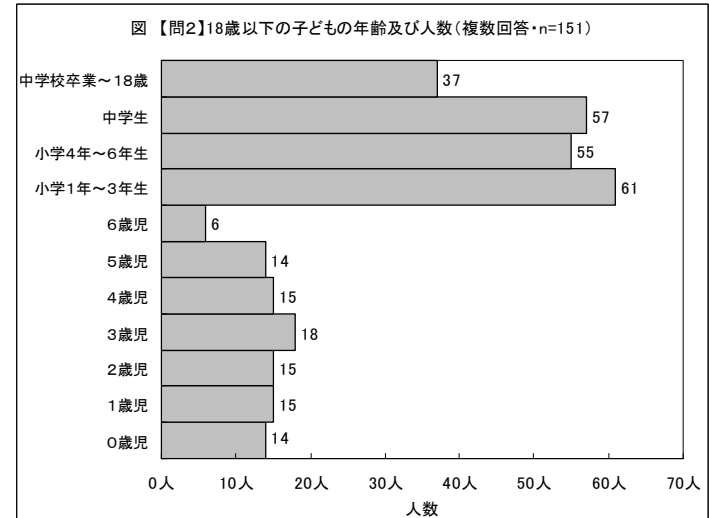
図【問1-6】住居(n=151)



■ 一戸建 □ 長屋建 □ 共同住宅 □ その他 □ 無回答

各年齢の子どもの数はおおむね10人から20人の範囲である。  
乳児・低年齢児の保育所入所率が低い。

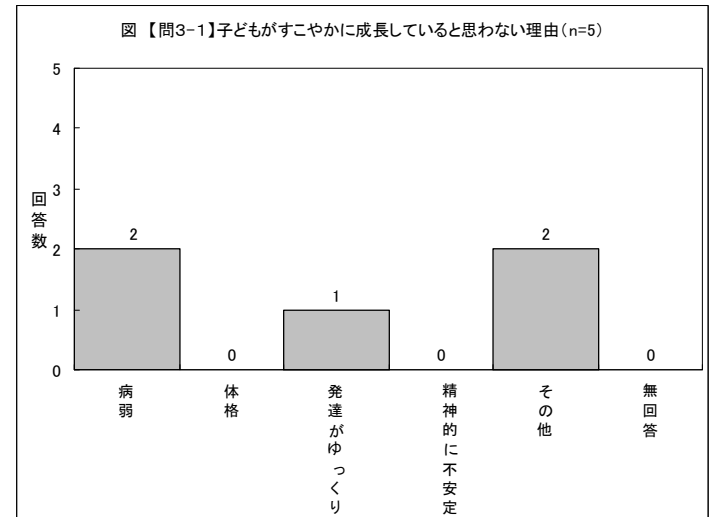
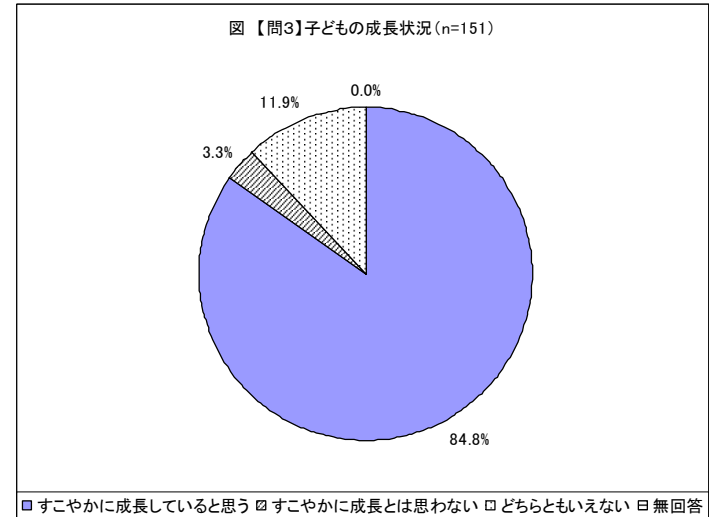
- 未就学児童はおおむね各年齢とも15人前後である。
- 小学生以上は3歳単位の集計値だが、各年齢とも同数程度と考えると、小中学生は各年齢20人前後、中学卒業以上は約12人となる。
- 各年齢の子どもの人数は、未就学児童および中学卒業以上が相対的に少ない。
- 未就学児童の保育所・幼稚園の入園率は、4歳児以上がほぼ100%となっている。一方、低年齢児の入園率は、年齢が低くなるとともに低下し、0歳児はゼロである。
- 乳児・低年齢児保育の充実が、子育て支援の一つの課題と見られる。





85%の回答者は子どもの成長に問題がないと思っている。

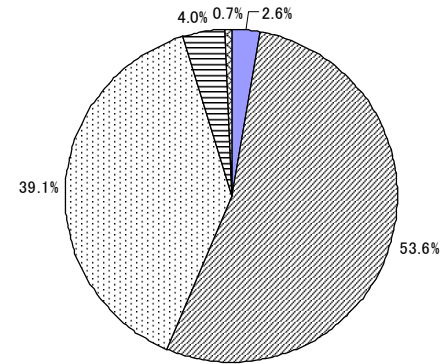
- おおむね85%の回答者は、子どもがすこやかに成長していると思っている。
- 子どもがすこやかに成長していると思わない理由は、病弱2人、発達がゆっくり1人、その他1人である。



半数以上の回答者は子育てに自信が持てない時がある。  
しつけの仕方や子どもの性格などが自信を失う理由である。

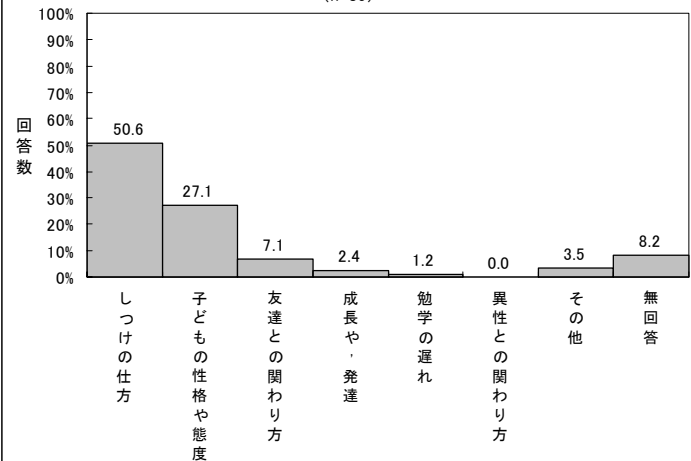
- 50%以上の回答者は、子育てに自信が持てないと時々感じている。一方で、約40%の回答者は、自信が持てないとはあまり感じていない。
- 子育てに自信が持てないと常に感じる、または時々感じる理由の約50%は、しつけの仕方である。続いて子どもの性格や態度が30%近くを占め、80%近くの回答者がしつけまたは子どもの性格・態度で自信を持てない経験をしている。

図【問4】子育てに対する自信 (n=151)



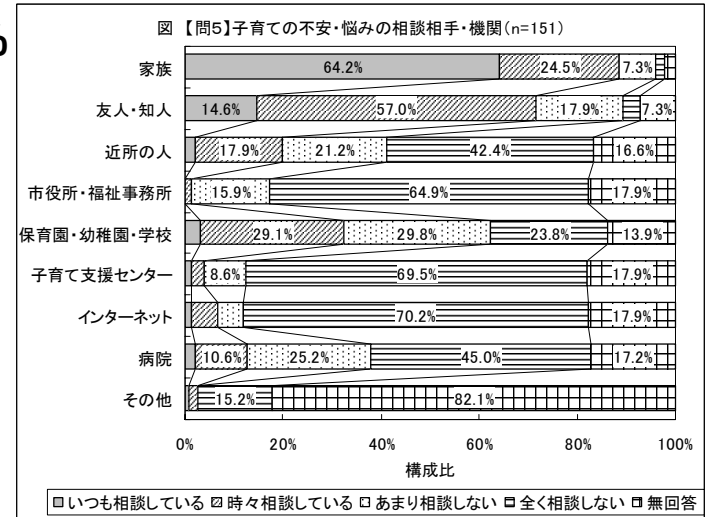
■ 常に感じる □ 時々感じる □ あまり感じない □ 全くない □ 無回答

図【問4-1】子育てに対する自信が常にまたは時々持てないと感じる理由 (n=85)



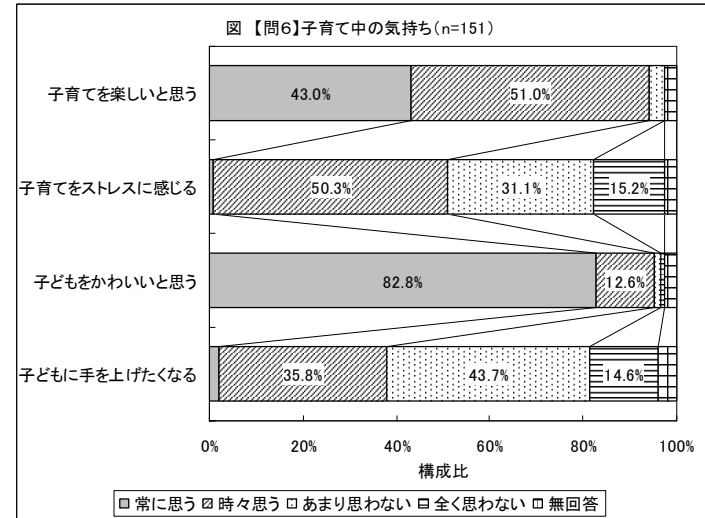
60%以上の回答者が子育ての悩み等を家族に相談している。

- 子育ての不安・悩みの相談相手・機関は、60%以上の回答者が家族にいつも相談している。
- 60%近くの回答者は友人・知人に時々相談している。
- 65%から70%の回答者は市役所・福祉事務所、子育て支援センター、インターネットを、相談先・情報源としてまったく利用していない。



80%以上の回答者が子どもをかわいいと常に思っている。

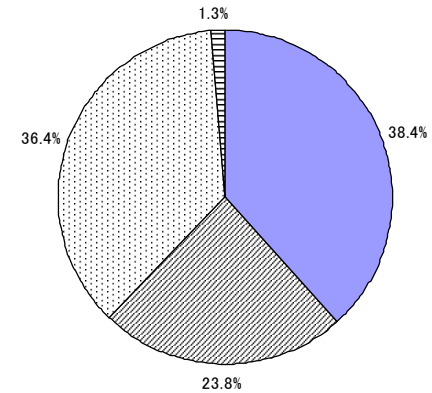
- 子育て中の気持ちは、80%以上の回答者が子どもをかわいいと常に思っている。
- 40%以上の回答者は子育てを楽しいと常に思い、50%以上が時々楽しいと思っている。
- 約50%の回答者は子育てをストレスに感じると時々思うが、30%強はあまり思っていない。
- 45%近くの回答者は、子どもに手をあげたくなるとあまり思わないが、約35%は時々思うことがある。



40%弱の回答者が居住地区は子育てしやすいと思っている。  
子育てしにくい主な理由は遊び場所が少ないことである。

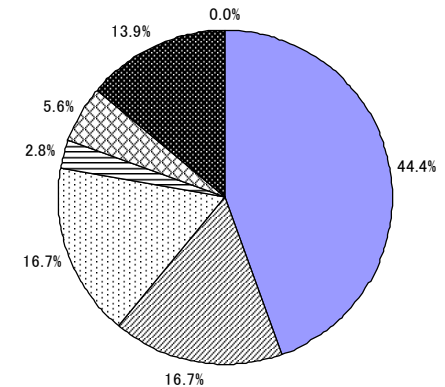
- 40%近くの回答者が、居住地区は子育てがしやすいと思っている。一方で、ほぼ同じ割合の回答者がどちらともいえないと思っている。
- 子育てがしやすいと思わない理由として、約45%の回答者は遊び場所が少ないことを挙げている。続いて、15%以上の回答者が支援の施設等が少ないこと、病院や保育所が少ないことを挙げている。

図【問7】居住地区の子育てしやすさ(n=151)



■ 思う □ 思わない □ どちらともいえない □ 無回答

図【問7-1】居住地区の子育てしやすいと思わない理由(n=36)

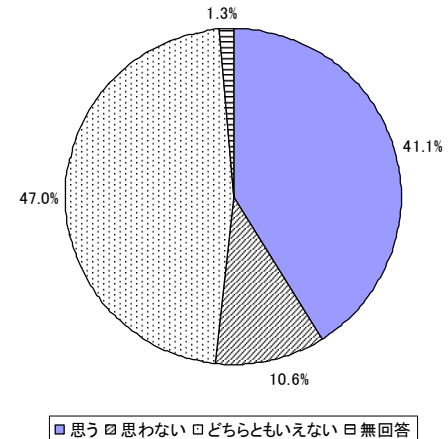


■ 遊び場所が少ない □ 支援の施設等が少ない □ 病院や保育所が少ない  
□ 近所の支援がない □ 干渉されることが多い ■ その他  
□ 無回答

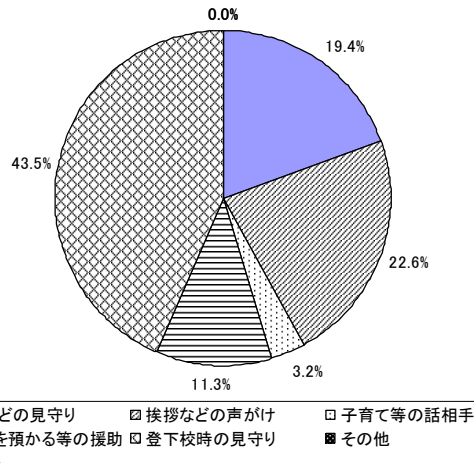
40%強の回答者は子育てを応援してほしいと思っている。  
登下校時の見守りを応援してほしいと思う回答者が多い。

- 地域の方が子育てを応援してくれることについて、50%近くの回答者はどちらともいえないが、40%強は応援してほしいと思っている。
- 応援してほしいと思う回答者の45%近くは、登下校時の見守りを望んでいる。
- 応援してほしいと思わない回答者の40%以上は、子育てに特に困っていない。一方、30%強は子育てに干渉されたくない。

図【問8】地区の人による子育てへの応援(n=151)



図【問8-1】地区の人に応援してほしいこと(n=62)



図【問8-2】地区の人に応援してほしいと思わない理由(n=16)

